

## 西行の命、芭蕉の命

(旧東海道を日坂宿から金谷宿へ)

平成 25 年 8 月 25 日

永井 藤樹

平成 22 年 (2010)、この年の夏はことの外暑い夏であった。天気予報は連日異常な暑さを伝えていた。

八月、私は旧東海道を日坂宿から金谷宿を目指して歩いた。6km 強の道のりである。金谷宿は、品川から数えて 24 番目の宿場になる。大井川を渡り、牧ノ原台地に至る台地の下にその宿場はある。この道を西行も芭蕉も歩いた。途中、古歌に詠まれた歌枕の地「小夜の中山」がある。

延宝 4 年 (1676) 夏、芭蕉は初めての東下以来、4 年間滞在していた江戸を発って、郷里伊賀上野へと向かった。32 歳の時である。彼は寛文 12 年 (1672) 「雲を隔つ 友にや雁の いきわかれ」を詠んで藤堂藩に別れを告げた。藩主藤堂高虎に列なる藤堂良忠に小姓として仕えたが、兄と慕った 2 歳年上の良忠の死に逢い、准士分の身であった芭蕉にとって、伊賀上野に引き留めるものはなかった。彼は 4 年間の江戸滞在中で、俳諧の宗匠として“たずきの道”を立てる自信を得たのではないだろうか。

私は東海道本線を掛川駅で降り、粟が岳山麓の「東山」を終点とするバスに乗り「八幡宮前」で下車、宿場町の名残りを留める今は寂れた日坂の家並みを過ぎたあたりで、国道一号線を横切り、旧東海道に入った。いきなり胸突き八丁の急坂である。しかし、うねるように昇る坂道も次第に緩やかになり、急に視界が開けた。茶



広重の日坂二曲がり

畑がどこまでも広がる。芭蕉は東から西に向かったが、私は芭蕉とは逆の道を取った。箱根峠、鈴鹿峠と共に旧東海道の三大難所と言われるこの中山峠を、歩いてみたかったからである。季節も同じ夏、時代を同じ

にできなくても、空間を共有することはできると思ったからである。

濃い緑の茶園がどこまでも続く。しかし、芭蕉はこの景色を見ていない。このあたりは明治になって、禄を失った徳川の武士によって開墾されたからである。時折、軽トラックが土煙を挙げて追い抜いていく。土ぼこりは暫く空中に留まり、白茶けた道に陽炎が揺らめく。屋敷林は影を作らず、日はあくまでも高く照り、蝉しぐれがかえって静寂を感じさせる。物憂く動くものはない。



茶畑



涼み松公園

「夜泣石跡」の道標を過ぎると、道の傍らに低い竹垣で囲われた公園がある。中に支えを残したままの小ぶりの松と、三角形の石が置かれている。ここで芭蕉は「命なり わずかの笠の 下涼み」を詠んだ。『江戸広小路』に載っている。

句意は、「日よけに被った

菅笠が作るわずかの影を涼み所として、今私の命はここにある」ということになろうか。三角の石は、その句碑である。炎暑に苦しみながらの旅中の傑作である。「命なり」は、西行の和歌に響かせている。



芭蕉句碑

ここから20分ほど歩いた所に「小夜の中山公園」がある。丸い水たまりの中に円筒形の歌碑が立てられていて「年たけて また越ゆるべしと おもひきや いのち

なりけり さやの中山」と書かれてある。

西行69歳の歌である。『西行法師家集』のこの歌の前書に「あづまのかたへ相識りたる人のもとへまかりけるに、小夜の中山見しことの昔になりたりけるを思ひ出でられて」とある。「険しい小夜の中山を越えたのは、若い頃であった。その時、老いて再びこの山中を越えることになると思ったであろうか。あろうことか、私はまたしても小夜の中山を越している。命あればこ

そだ、これが命、私の宿命というものだ。」過去の自分と現在の自分を対比させながら、命の確かな連続と、波瀾に満ちた己の人生に深い感概を抱いたのではないだろうか。

文治2年(1186)、西行は伊勢から陸奥へと旅立った。陸奥への旅は二度目になる。出羽を含む奥州への初出の旅は、出家して4年が過ぎた天養元年(1144)27歳の頃、能因法師の旅路の跡を辿る歌枕探訪の修行であった。

6年前の治承4年(1180)「源平合戦」に際して、平重衡によって焼失した東大寺再建を志した重源上人から、西行は平泉の藤原秀衡への砂金勧進を依頼された。西行が秀衡に繋がる遠い一族になることも、さらに彼が文学、芸能、政治、宗教など当代文化のあらゆる領域に熟達した人物であることを重源はよく知っていた。西行にとって、40年前の東下りを思い起こしながらの旅路であったろう。この旅で、将



西行歌碑



軍頼朝と会談したことが重要である。会談の目的は平泉からの砂金の送進について、東国通過の確証を得るためである。頼朝が妨害しない確約がなければ、砂金を送ることは不可能であったからである。頼朝は武家の棟梁として、武士に伝統行事、王朝文化の素養を身につけさせたいと願っていた。だから「流鏑馬の神事」を初めとする“秀郷流”の有職故実を、彼にとって垂涎の的であった。武威だけによる東国支配の難しさを、政治家頼朝はよく心得ていた。西行もしたたかである。頼朝との取り引きの具に、これを使ったのである。頼朝の確約を得て砂金は、無事西国に届けられることになる。会談を終えた西行が、頼朝から贈られた純銀の猫を通りすがりの子どもにくれてやったのは、この時のエピソードである。

西行歌碑の立つ「中山公園」から100m程行った所に「久延寺」がある。掛川城の城主であった山内一豊が庇護した寺で、境内に慶長5年（1600）6月、大坂から会津の上杉景勝討伐に向かう徳川家康を、一豊が持て成した茶亭があったと伝えられている。今は微かにその痕跡を残すのみである。この寺は「夜泣石」の伝説で知られている。境内の一角に小屋根が掛けられ、その中に不思議な霊力を感じさせる球形の大石が安置されている。



「久延寺」からさらに道を進めると、日坂宿からの坂と、南から登ってくる「菊川坂」、金谷宿からの「金谷坂」この三つの坂道を登り詰めた合流点に

「諏訪原城」の城跡がある。武田信玄・勝頼親子二代に渡り、甲州流築城術によって築かれた堅固な山城である。遠州中央部に位置する家康の「高天神城」攻略を目的にした陣城である。深い空堀と高い土塁、多くの馬出が400年以上経った今でもしっかりと残っている。天正3年（1575）長篠の合戦による武田氏滅亡後は徳川氏の居城となったが、なぜかいつ時、今川氏真が城主になっている。氏真は、桶狭間の戦いで敗れた今川義元の息子である。いずれにしても元和偃武の後、廃城になり今は夏草が生茂るままである。ここからの「金谷坂」は、石畳路である。江戸幕府は、近郷集落の助郷に命じて山石を敷き並べさせたが、近年わずかに30数mを残すのみとなった。そのため地元の有志を募り「平成の道普請」で430mが復元された。「日坂宿」から強い直射日光に照りつけられて歩いた



この街道も、終点の「金谷坂」からは杉木立に囲まれ、木漏れ日のゆれる石畳が続

く。こうして私はこの夏の暑い一日を、西行・芭蕉と空間を共にして「金谷宿」へと下った。